様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １８ 日現在

機関番号：３２６４１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2018
課題番号：１５Ｋ０２５２８

研究課題名（和文）広東語・チワン語結果構文の類型論的研究―地理的連続性の問題をめぐって―

研究課題名（英文）A Typological Study of Resultative Constructions in Cantonese and the Zhuang languages: With the Main Focus on the Issue of the Geographic Contiguity

研究代表者
石村　広（ISHIMURA, HIROSHI）

中央大学・文学部・教授

研究者番号：００３２７９７５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、漢語系言語とタイ語系言語の結果構文に関する調査・分析を通じて、橋本萬太郎博士が提唱した言語類型地理論（1978年）を文法面から再検証した。漢語系言語の結果構文は広東語を含め複合型を基本とするのに対して、タイ系言語は分離型の語順を基本とする。南方方言に残存する中古漢語由来の分離型は、複合型に比べて他動性の低い文法形式である。しかし、タイ系言語との接触が濃厚な地域には、分離型の方が優勢な漢語方言が存在する。漢語方言に見られるこの２つの分離型は、発生メカニズムが根本的に異なる。語順の違いが他動性（使役性）の強弱に関与しないタイ系言語と漢語との間に、地域的推移による連続性は認め難い。

研究成果の学術的意義や社会的意義
漢語系言語とタイ系言語は、どちらも孤立型言語に属するが、前者は語順の違いによって他動性（使役性）の強弱を表す言語であるのに対して、後者は語順の違いが他動性の程度を表すための文法的手段にはなっていない。本研究の調査・分析によって、広東語の結果構文（複合型）とチワン語の結果構文（分離型）は、形式的側面に着目すると地理的推移による連続性が認められるが、文法的には異質なメカニズムをもつことが明らかにされた。本研究の成果は、孤立型言語どうしの比較・対照に新たな視点を提示することができるばかりでなく、漢語方言文法や言語接触、結果構文分析の領域にも新たな研究基盤を構築するために寄与するものと考える。

研究成果の概要（英文）：VOR (the“verb-object-resultative complement”word order) that prevailed in Middle Chinese is still used in South China, although it has basically disappeared in North China. The research suggests that VOR is usually limited to irrealis uses such as the subjunctive mood and an imperative sentence, because it is a syntactic form that shows lower transitivity than VRO (the“verb-resultative complement-object”word order). However, frontier languages spoken mainly in parts of the Guangxi Zhuang Autonomous Region have highly productive VOR that can describe realis situations. VOR prevails in these areas because of “language contact” with Kam-Tai languages that always use VOR, especially the Zhuang languages. This observation shows that the origin of VOR spoken among the frontier languages cannot be entirely dated back to Middle Chinese. Different from the prevailing opinions like Hashimoto (1978), the grammatical mechanism of Chinese is not identical with that of Kam-Tai languages.

研究分野：中国語学

キーワード：結果構文　漢語方言　タイ系言語　言語類型地理論　使役性　語順

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

（１）橋本萬太郎博士の言語類型地理論（1978 年）

橋本（1978）は、古代語から現代語への統辞法の変化というタテの変化が、南方語（順行構造）から北方語（逆行構造）への統辞法類型の推移というヨコの変容となって具現していると主張する。実際に、中古漢語の分離型結果構文は、宋代以降に複合型へと変化するが、現代でも南方漢語には分離型の語順（順行構造）が見られるのに対して、北方漢語では複合型の語順（逆行構造）しか認められない。橋本によれば、南方語と北方語の地域的推移の中間に位置する漢語系言語は、タイ語がアルタイ語化して生じたものである。方言間の違いは発音や語彙に限られると考えられていた時代に、統辞法の上にも重大な違いがあることを指摘した功績は極めて大きい。細部に見解の相違があるとはいえ、この考え方は今でも漢語研究者の文法観に強い影響を与えている。

（２）語順の違いが漢語の構文形成に果たす役割

結果構文とは、２つの出来事の因果関係によって状態変化使役を表す文、つまり行為と結果を表す文を指す。北京官話の典型的な結果構文は「他動詞＋自動詞（形容詞）」の組み合わせからなる「動詞＋結果補語」構造を用いる。例えば、“武松打死了老虎”（武松は虎を殴り殺した）という文は、「武松が虎を殴った結果、その虎が死んだ」という意味内容を述べている。“打死”のような「他動詞＋自動詞」の組み合わせが「虎を殴って死なせる」、つまり「殺す」と、一種の状態変化使役を表すわけである。ところが“打”も“死”も個別に見ると使役義をもたない。この複合構造の使役義は一体どこから生じるのか。この問題は、２つの述語を動詞連続構造とみなせば解決する。北京官話は、語順によって使役性の強弱を表す。

兼語式：N1 + V1 + N2 + V2　（V2 は意志動詞。ただし“使”を除く。）
動補式：N1 + V1 + V2 + N2　（V2 は非意志動詞または形容詞）

複合述語の後ろに目的語を従える統語形式“打死了老虎”は、変化対象となる目的語“老虎”に対する使役力の強化を意味する。複合述語を一語動詞に見立てた「動詞＋目的語」という統語的な型の力を利用して使役性の優れて高い場面状況（語彙的使役）を表すのである。一方、“妈妈叫孩子打扫房间”（母親は子供に部屋を掃除させた／掃除するように言った）のような他者に対してある行為を誘発することを表す兼語式使役文は、被使役者（被動者）の意志性が介在するので動補式よりも使役性は劣る。この V1 は漢語文法では使役動詞とされるが、厳密には使役義をもたない。この動詞の意味範囲は原因行為のみで、結果の部分は含まれていないからである。漢語の語順の違いは、意味の問題、すなわち使役性の強弱と連動している。いわゆる「意味上の受身」も漢語に特徴的な文型であり、東南アジアの標準タイ語には認められない文法現象である。

２．研究の目的

（１）本研究は、漢語とタイ語系の広西チワン語の結果構文に関する調査・分析を通じて、橋本萬太郎博士が『言語類型地理論』（1978 年刊）において提唱した学説を再検証するとともに、言語類型論の領域に新たな知見を提示することを主たる目的として行った。橋本によれば、タイ系言語（主要部先行型の語順を持つ言語）とアルタイ系言語（主要部後続型の語順を持つ言語）の中間に分布する漢語系言語は、タイ語がアルタイ語化して生じたものである。タイ系言語と北京官話の結果構文の語順の違いは、地理的推移して捉えることができる。2 つの述語の間に目的語を置くことができない北京官話の複合型は、膠着型言語（河野六郎博士のことばを借りれば「アルタイ用言複合体」）に近似している。本研究は、地理的連続性と歴史的変化という 2 つの観点から漢語の類型学的位置づけを行った橋本説の実際の状況を検証した。

（２）本研究は、中国語学の領域にとどまらず、一般文法理論に基づく結果構文の分析にも新たな証拠を提示するものである。日・英両語の結果構文を分析した代表的な研究に、影山(1996)と Washio(1997)がある。これらの研究成果によると、世界諸言語の結果構文は２つのタイプ、すなわち、①状態変化動詞の内在的意味に刻み込まれている「変化した状態」を結果述語によって特定化するタイプ（本来的結果構文）と②働きかけのみを表す行為動詞に結果述語が加わることによって限界的事態を表すタイプ（派生的結果構文）に分けることができる。英語、ドイツ語、オランダ語、イタリア語、ロシア語などは①だけでなく②も許容する言語であり、朝鮮語、インドネシア語、モンゴル語などは②のみ可能な言語である。結果構文を有する言語は、この 2 つのタイプのいずれかに分類が可能であるとされている。しかし、彼らが提唱する結果構文の類型は、１つの主要動詞からなる文を考察対象としており、２つの節（動詞連続）からなる結果構文についてはほとんど言及していない。本研究は当該領域に新たな知見を提示すべく、南方漢語の用例を広い範囲で多角的に調査・分析した。

（３）広東語を含む漢語とタイ系少数民族言語との言語接触パターンを解明する。歴史的に見ると、魏晋南北朝時代から宋代にかけて複合型と並行するかたちで分離型の言い回しが盛んに用いられた。例：“女迺呼婢云，喚江郎覺”（娘はそこで腰元を呼び、「江の旦那様を呼び起こし

なさい」と言った）（《世說新語・假譎》）。宋代以降、分離型は複合型に合流して衰退・消滅した。現在では一部の南方方言にその痕跡を留めるのみである。漢語方言の分離型は、未然の事態を表すなど語用論的制約があり、生産性も低い。ところが詳しく調査した結果、広西チワン族自治区や海南省で話されている漢語方言には、複合型よりも優勢で生産性の高い分離型が存在することが判明した。先行研究では漢語方言に現れる分離型を一律に中古漢語の残留形式と記述しており、タイ系言語との接触が濃厚なこうした周縁地域の結果構文の使用状況に関しては、研究事例が極めて乏しい。本研究は、歴史的継承関係だけでなく、言語接触の可能性を考慮することによって、漢語結果構文の文法メカニズムの解明を試みた。

なお、本報告書でいう「タイ系言語」とは、具体的には中国領内で使用されているシナ・チベット語族チワン・トン語派（壮侗語族。語族は漢語で語派の意）に属する次の言語を指す――チワン語（壮語）プイ語（布依語）ダイ語（傣語）、トン語（侗語）、スイ語（水語）、ムーラオ語（仫佬語）、マオナン語（毛南語）、コーラオ語（仡佬語）、リー語（黎語）等。詳細は『漢蔵語概論』（馬学良主編，北京：民族出版社，2003 年）を参照。なお、欧米の研究者はタイ系言語をタイ・カダイ語族（Tai–Kadai languages）に分類し、シナ・チベット語族とは異なる系統に属する言語と見なしている。

３．研究の方法

（１）漢語方言の結果構文に関するインフォーマント調査を、広東語を含め広い範囲で行った。中古期の“隔開式”を継承する現代漢語の分離型は、基本的に未然法をもつものと推測される。このタイプ以外にどのようなものがあるのか具体的に調査した。調査項目として、どのような文脈と形式で使用されるか（已然・未然、現実・非現実、命令文、仮定節、平叙文など）、目的語の意味的特徴（一般名詞、代名詞、定、不定、音節数など）、補語の文法特徴（単音節語か複音節語か、動詞か形容詞かなど）を設定した。

（２）チワン語のインフォーマント調査は、広西壮文学校の黄善華氏に協力を依頼した。一部のチワン語は漢語の影響を強く受けているため、本来的な表現や文法構造を把握しにくい状況になっている。そこで東南アジアの標準タイ語を加えて、同一の言語類型に属する言語どうしの比較・対照を行った。

（３）広東語を含む漢語方言の歴史的状況について文献で確認した。併せて、先行研究資料の調査と整理を進め、各言語の結果構文に関する文法機能を分析した。変更・修正等本研究の分析的枠組みに修正が生じた場合、それを調査結果にも反映させた。

４．研究成果

（１）原因と結果の関係から成る 2 つの述語を使って状態変化使役を表す文を結果構文という。本研究では、まず「動詞＋結果補語」構造を用いた漢語結果構文にはどのようなタイプがあるか調査するところから着手した。調査の結果、概略、次の５つのタイプが存在することを指摘した。以下、動詞を V、結果補語を R、目的語を O で表す。

１．北京官話型：複合型のみ用いられ、分離型の語順は非文法的となるタイプ
北京官話では、状態変化のような使役性の高い場面状況を“打破了杯子”（コップを割った）のように「動詞＋結果補語＋目的語」の語順で表す。2 つの述語の間に目的語が置かれる“*打杯子破了”は、不適格な表現である。南北を問わず、官話系を含む大部分の漢語方言はこのタイプであり、広東語（粵語広州方言）もこのタイプに属する。

２．上海方言型：複合型は既然または現実（realis）を基本とし、分離型は未然または非現実（irrealis）を表すタイプ。この意味機能の違いは、語順の違いから生じる。願望や仮定といった非現実の事態は、複合型が表す現実の事態よりも他動性（transitivity）が低い（Hopper and Thompson1980）。つまり、VOR 語順は VRO 語順よりも使役力が弱い場合の文法形式である。このタイプは、呉方言と閩方言に集中している。例えば、上海語の結果表現は複合型が基本だが、一部で分離型の使用も確認されている（ただし、現在では中高年以下は使用しないか、あるいは生硬な表現と感じられる）。例：“要敲伊碎才好丢脱”（それを叩き割ってこそ捨てることができる）。この語順は未然の文脈において成立し、一般に強調や提案・要求の語気を含む。実際に、完了を表す助詞“勒”とは共起しない。完了を表す“勒”を用いる場合は、目的語を介詞“拿”を用いて述語の前に置くか（“拿伊烧酥勒”）、あるいは複合述語の後ろに置かなければならない（“烧酥伊勒”）。このタイプは他にも、舟山、寧波、紹興、東陽、嘉善、武義などの呉語地域で確認された。

３．厦門方言型：上記２のタイプと同様に、複合型を基本とし、分離型は未然または非現実を表すが、分離型の動詞と補語の間に別の文法成分が割り込むタイプ。上の２を無標識の分離型とすると、こちらは有標識の分離型ということなる。例えば、未然の文脈で用いられる“吃互伊了”（それを食べ終える）は、“互”（ho）という受益動詞由来の使役成分を伴っている。このタイプは閩南語の他、客家語にも認められる。

４．温州方言型：複合型を基本とするが、分離型も已然を表すことができるタイプ。本研究

が行ったインフォーマント調査によると、この種の分離型は、呉語温州方言“小李不小心打一个碗破爻”（李君はうっかり茶碗を一つ割ってしまった）のように、目的語は常に数量フレーズを伴わなければならない。つまり、目的語は「不定」でなければ分離型の語順が成立しない。これは複合型よりも他動性が低い条件で生じることを意味する（複合型の場合、目的語は常に述語に前置される）。秦漢期以前の温州で話されていた古越語は侗台語（タイ系言語）に属するとされるが、このタイプの分布範囲については基層語の問題も関連し、なお不明な点が多い。今後の詳しい調査が待たれる。

５．平話型：複合型と分離型を併用するが、分離型の方が優勢で已然も未然も表すことができるタイプ。広西粤語（「白話」とも呼ばれる）、平話（帰属については異論がある）、海南閩南語、海南三亜邁話（粤語と土着語との混合語）などがこれに該当する。本研究がこれまでに行った調査によると、このタイプが使用される地域は広西チワン族自治区と海南島に偏っており、タイ系諸言語との長期にわたる接触があった場所に限られる。詳細は後述する。

（２）厳密に言うと、漢語には上の５つのタイプの他にも、もう一つ重要な分離型の文法形式が存在する。それは可能補語形式である。可能補語形式にも、動詞と補語の間に目的語が割り込む現象が観察される。『漢語方言地図集』（曹志耘主編, 北京：商務印書館, 2008 年, pp.80,81）を見ると、漢語南方方言の多くが可能補語形式を通じて分離型を具現していることが分かる。その分布範囲は広く、浙江省、福建省、広東省の沿海部から安徽省南部、湖南省、江西省、広西チワン族自治区などの内陸部にわたる。「変種」も実に豊富である。例えば次のようである――［上海话］“我讲其勿过”／［福州话］“我讲伊勿会过”／［潮州话］“我咀伊唔过”／［建瓯话］“我勿会话得渠过”／［益阳话］“我讲不他过”。広州方言では、北京官話の“怎么也打不破它”（どうしても叩き壊すことができない）を“点都打佢唔烂”と分離型で表現することができるが、可能補語形式の否定文に分離型が現れるのみで、結果構文は北京官話と同じ複合形式である。可能補語は、結果の実現可能性について述べるものであるから、未然の事態を表していることになる。とりわけその否定表現には、分離型が現れやすい。否定は肯定よりも他動性が低いからである（Hopper and Thompson1980: 252）。

複合型 VRO　　分離型 VOR　　分離型可能補語形式

高 ←――――――――――――――――――――――――→ 低

他動性

本研究は、上に示した語順と使役の相関性の角度から、可能補語形式、中でもその否定表現が漢語方言に広く観察される原因について、初めて正式に一つの見解を提出した。

（３）上述のように、漢語系言語の結果構文は複合型を基本とするが、分離型が認められる場合、それは複合型に比べて使役性（他動詞）の低い文法形式である。これは方言横断的な現象であると考えられる。しかし、この仮説には反例が存在する。それが上の（１）の分類で示した「平話型」である。広西の漢語方言（広西粤語と平話）や海南省閩南語（屯昌方言）の結果構文は分離型の方が優勢である。已然法を基本とするなど生産性も高い。例えば、

(a)［賓陽平話］阿三敲水缸坏啊。（阿三は水がめをたたき割った）

(b)［南寧粤語］台风吹阿间屋冧晒。（台風が家を吹き倒した）

(c)［海南閩南語］伊擘许本册烂去。（彼はその本を引き裂いた）

このような「例外」が生じる要因として、タイ系言語（タイ・カダイ語族）との言語接触が考えられる。チワン語、トン語、ムーラオ語など中国西南地域に広く分布するタイ系言語の結果構文は、漢語と異なり分離型を使って既然の事態を表す。現在の中国領内のタイ系言語の中には複合型の結果構文を使用する言語も少なくないが、これは漢語の影響を受けて生じたものである（呉福祥 2009）。実際に、広東省内のチワン語は概ね複合型が優勢であり、広西武鳴では分離型と複合型が併用されている。さらに広西の西方にあり漢族との接触が相対的に少ない百色や靖西では、年代を問わず分離型が優勢である。武鳴チワン語の結果構文の用例を示す。

(d) kou¹ ɣat⁸ pjom¹ tin³ lo⁶.（我剪短了头发。）（私は髪を短く切った）
　我　剪　头发　短　了

(e) kou¹ siːŋ³ ɣat⁸ pjom¹ tin³ pai¹.（我要把头发剪短。）（私は髪を切って短くしたい）
　我　要　剪　头发　短〈语气〉

上の各例において、(d)は完了の事態、(e)は意志、すなわち非現実の事態を表しているが、いずれも VOR 語順が用いられている。いわゆる兼語式と同じ語順になるのである。

（f）ta⁴ po⁶ heu⁶ kou¹ ɕaɯ³ pjak⁷.（父亲叫我煮菜。）（父は私に料理を作らせた）
　父亲　叫　我　煮　菜

チワン語結果構文の語順は、使役性の強弱を表す文法手段として機能していない。

（４）本研究が明らかにした内容をまとめると、「広東語を含む漢語系言語の複合型とチワン語の分離型との間には、形式的側面において地理的推移が認められるものの、両者の構文形成のメカニズムは本質的に異なる」と結論することができる。これは漢語とタイ系言語は系統関係にないとする欧米の言語学者の見解ともかみ合う。この結論の傍証として、前項（３）の(ｃ)

に示した海南省の漢語方言の例を挙げることができる。海南省は漢族の他、リー族やミャオ族といった非漢語系言語を話す人々が先住する地域である。中でもリー語は、海南島における有力なタイ系少数民族言語である（系統関係には異説もある）。大陸から移住した漢人がもたらした閩南語は、言語接触によって中古期に生じた分離型の語順を維持・発達させながら今日に至ったものと推測される。

これらの内容を踏まえ、現代漢語における「分離型」結果構文の形成要因として、本研究では、新たに次の３つのパターンを提示した。

①中古期に生じた VOR 語順が残留している言語：呉語、閩語、客家語など多数

②中古期に生じた VOR 語順がタイ系言語との接触により保持されている言語：平話、海南閩南語など

③タイ系言語または平話のような VOR 語順が優勢な漢語方言との接触により VRO から VOR へと語順が変化した言語：南寧粤語（広西白話）など

従来の漢語方言研究では専ら①のパターンが想定されてきたが、本研究によって②と③の角度から検討する可能性が示された。とりわけ②の「保持」という言語接触パターンについては、当該領域の専門書にもあまり詳しく取り上げられていない。

本研究は、順行構造（タイ語）と逆行構造（漢語）という２つの言語タイプを扱った。だが、漢語の逆行構造、すなわち OV 型言語としての特徴は、アルタイ語以外の言語の影響も考慮に入れなければならない。漢語とチベット・ビルマ系諸語とが系統関係にあることは定論だが（Zhang M, Yan S, Pan W, et al. 2019）、漢語が歴史的継承性の強い言語であるとするならば、タイ系言語だけでなく、チベット系言語の語順やその能格型の文法システムも、漢語の類型学的特徴を考える上で射程に入ってくるはずである。従来の対格型言語の文法観に基づく分析アプローチを見直す必要があるということである。この新たな研究課題も、本研究を通じて得られた重要な成果の一つである。

＜引用文献＞

橋本萬太郎、言語類型地理論、1978、東京：弘文堂

吴福祥、南方民族语言动宾补语序的演变和变异、南开语言学刊、第 2 期、2009、pp.59–73

Hopper, Paul J., and Sandra A. Thompson, Transitivity in Grammar and Discourse. *Language*, 56.2, 1980, pp.251-299.

Zhang M, Yan S, Pan W, et al. Phylogenetic Evidence for Sino-Tibetan Origin in Northern China in the Late Neolithic. *Nature*, 2019: 1.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 8 件）

①石村広、従動詞的語義範囲看漢語句法的類型特点（動詞の意味範囲から見た漢語統辞法の類型特徴）、漢語語法研究的新拓展（九）、査読有、2019 年近刊、上海：上海教育出版社

②石村広、漢語南方方言的動賓補語序――兼談与壮侗語的語言接触問題（漢語南方方言の「動詞＋目的語＋補語」型語順――チワン・トン語との言語接触問題を兼ねて）、語言研究集刊、査読有、第 20 辑，2018 年、pp.193－210、上海：上海辞書出版社

③石村広、動結式的致使意義和使動用法的双音化（漢語結果構文の使役義と使動用法の複音節化）、語言類型学集刊、査読有、第 1 輯、2018 年、pp.94－110、北京：世界図書出版公司（⑧の再録）

④石村広、関於近代漢語時期的“隔開式”（近代漢語期の「隔開式」について）、楊凱栄教授還暦記念論文集・中日言語研究論叢、査読無、2017 年、pp.253－26、東京：朝日出版社

⑤石村広、論《語言地理類型学》的語法観（『言語類型地理論』の文法観について）、慶應義塾中国文学会報、査読有、第 1 号、2017 年，pp.1－14、慶應義塾中国文学会

⑥石村広、動結式的致使意義和使動用法的双音化（漢語結果構文の使役義と使動用法の複音節化）、人大複印報刊資料・語言文字学、査読有、2016 年第 8 期、pp.3－14、中国人民大学書報資料中心（⑧の再録）

⑦Ishimura, Hiroshi、Causative meaning of Chinese resultative constructions and disyllabification of unmarked causative usage, CNKI Journal Translation Project, Translated from the Chinese edition, Contemporary Linguistics, Vol 18, No. 03, July 2016, 339-353. China Academic Journals (CD Edition) Electronic Publishing House Co., Ltd. http://jtp.cnki.net/bilingual/

⑧石村広、動結式的致使意義和使動用法的双音化（漢語結果構文の使役義と使動用法の複音節化）、当代語言学、査読有、2016 年第 3 期、pp.339–353、中国社会科学院語言研究所

〔学会発表〕（計 9 件）

①石村広、従使動和自動的対立看漢語動結式的類型特点――以施通格語言的語法現象為参照（使動と自動の対立からみた漢語結果構文の類型特徴――能格･絶対格型言語の文法現象を参考に）、第二十次現代漢語語法学術討論会、2018 年 10 月 9-12 日，広州：暨南大学

②石村広、致事型数量動結式的語義結構及其生産動因（原因型数量補語結果構文の意味構造と

その生産動因)、第七届当代語言学国際圓卓会議、2017 年 10 月 20－22 日、杭州：浙江大学
③石村広、従動詞的語義範囲看漢語句法的類型特点（動詞の意味範囲から見た漢語統辞法の類型特徴)、第九届現代漢語語法国際研討会、2017 年 10 月 14-17 日、ソウル：延世大学
④石村広、漢語南方方言的動賓補語序――兼談与壮侗語的語言接触問題（漢語南方方言の「動詞＋目的語＋補語」型語順――タイ系言語との言語接触問題を兼ねて)、現代漢語語法前沿論壇、2017 年 8 月 26-27 日、上海：復旦大学
⑤石村広、使動用法からみた中国語の類型特徴について、第７回漢語方言研究会、2017 年 4 月 22 日、愛知東邦大学
⑥石村広、「隔開式」動補構造から見た言語類型地理論の問題点、第５回漢語方言研究会、2016 年 8 月 30 日、近畿大学東京センター
⑦石村広、漢語南方方言的動賓補語序的形成動因（漢語南方方言「動詞＋目的語＋補語」型語順の形成動因)、第八届現代漢語語法国際研討会、2015 年 10 月 24-26 日、中国：浙江大学
⑧石村広、動結式的致使意義和使動用法的双音化（漢語結果構文の使役義と使動用法の複音節化)、第二届語言類型学国際学術研討会、2015 年 10 月 17-18 日、中国：南昌大学
⑨石村広、関於動結式的“補語”問題――従動詞連用結構的角度談起（動補構造の「補語」問題――動詞連続構造の角度から)、“漢語語法研究与習得――句法和語義”国際研討会、2015 年 6 月 5-6 日、フランス：パリ第 7 大学

〔図書〕（計　　件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織

(1)研究分担者
研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：
研究者番号（8 桁）：

(2)研究協力者
研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。